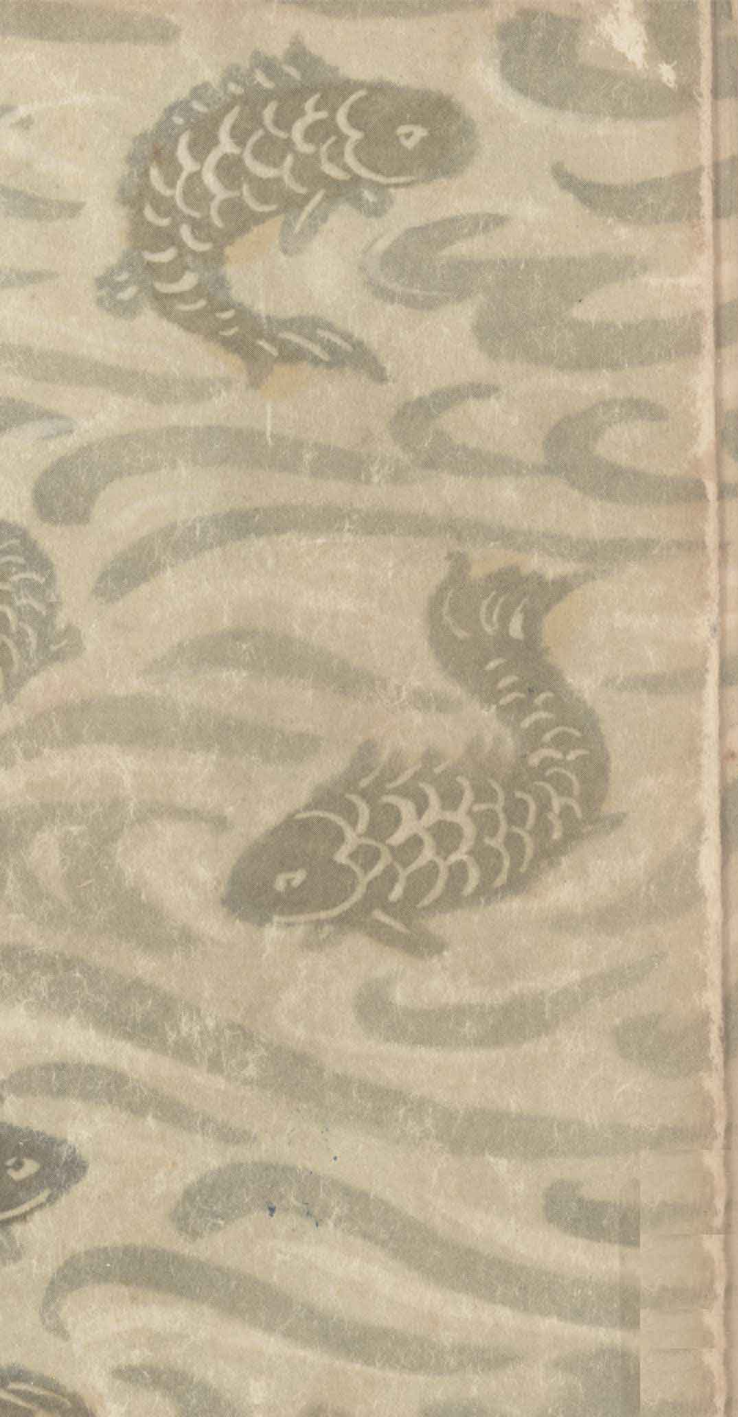


柳生武藝帳

卷之三

五味家



柳生武藝帳

卷之三

間^ま遠^{とお}渡^{わた}り

上味康^り

柳生武藝帳

卷之三 間速渡り

昭和三十三年五月十一日 印刷
昭和三十三年五月十五日 發行

定價貳百六拾圓

地方 賣價 貳百七拾圓

著者 五味康祐

發行者 東京都新宿區矢來町七十一
佐藤亮一

印刷者 東京都千代田區神田神保町三ノ二三
塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

發行所 東京都新宿區矢來町七十一
株式會社 新潮社

電話東京三四局代表七一(九)
振替東京 八〇八番

製本 神田 加藤製本所

卷之三
目次

紅紅 密 神 曲 六 疾 衣 一 一
江 庫 裳 階 階
水 众 替 笠 笠
燈 驅 无 (二) (一)
談

.....
二四

.....
一〇

.....
九

.....
八〇

.....
六

.....
五

.....
四

.....
三

.....
二七

.....
一六

4

指	間*	美	石	野	夕	苦 ^一	御	雌	呼 ^{よび}
打	速 ^{すみ}	し	燈		映	肉			續 ^{つぎの}
の	渡 ^{わた}					の			
條	り	松	籠	風	え	計	堂	雄	濱 ^{はま}
.....
三三	三三	三〇	一九	一八	一六	一七	一四	一五	二四

装幀・挿繪

木下二介

柳生武藝帳 卷之三

亂 懸 け (續)

夕姫は、その跡を追わなかった。多三郎には黙っているが、彼女は、實は眼を侵されていたのである。

賀源太が柳生家に忍び込んで手傷を負ったのを、夕姫が傳通院の宿坊で眞心こめて介抱していた夏の夜に、湯殿で、千四郎から墮胎をすすめられたことがあった。あの時、「我ら霞の兄弟斷じて姫の敵ではない」と千四郎の言いのこした言葉が、心に残り、思案のすえ、遂に、龍造寺家再興の宿願を果すまでは不義の子は産むまいと彼女は決意した。そうして千四郎に教えられた牡丹の煎薬を服用した。

——結果、見事に胎兒は墮りたが、牡丹の根の服用が過ぎてか、或いは他の理由でか、墮胎後高熱がつづき、突如として視力を失ったのである。

賀源太は、もともとが姫の孕んだのを喜んでいなかったから、流産にはさして不満を見せなかった。(夕姫は賀源太には内密に牡丹の煎薬を呑んだ。)が、夕姫の失明に、賀源太の見せた狼狽は彼女より甚しかったという。

賀源太には、私かな大望があったのである。「くノ一の術」は忍者共通の夢だが、義齒の技術ばかりは忍びを以てしても如何ともなし難い。そこで、賀源太は「くノ一の術」の逆用を思いついた。夕姫を時に應じて男に變身させるのだ。常の女人には不可能だが、武藝のたつ夕姫ならこれはさしたる難事でない。むろん、繰返しのきく事ではないが、禁中を舞臺として、唯一度、賀源太もまた柳生宗矩の向うを張った大芝居を企んでいたからである。

夕姫に失明されてはその野望が潰える。そこで、あらゆる手段を講じ——主として藥草の入手方だが——姫の視力を恢復させるために賀源太の見せた努力と、忍耐強さと、執念はいっそ賞讃に値する。負傷の癒えぬ自らの身に鞭打って、片脚を引摺り、松葉杖にすがって江戸周辺の山に草を求めてさまよい歩いたのである。夕姫が、そんな男の努力をふと愛の深さと受取ったのも無理ではなかった。

彼女は、純粹に、ただそんな男に應えるために一日も早く視力を得たいとのぞんだ。見えぬ眼で、手さぐりに賀源太の傷口へも繻帶を巻いてやった。うす暗い宿坊の一室に、そうした、盲と不具の夫婦が互いに相手を施療する光景は、いっそ妖しい美しさを漲らせていたろう。

夕姫の眸が、かすかに光りを感じ出來たときの、だから二人の喜びは想像するに難くない。この頃、夕姫の叔父伯庵は彼女が事もあろうに賀源太の想われ者になったのを知り、落膽したか、忿ってか、一度、激しい罵言 彼女に浴びせてから、部屋を出たきり戻らなくなっていた。他所目にも二人は夫婦で暮らしていたわけである。ただ、それが男の慾念というものであろう、視力

の上に交嬪が災いすると信じて、賀源太は閨事に及ぶことだけ慎しんだ。

少しずつ夕姫は視力を恢復した。逆に、賀源太は傷が悪化し、左脚を腐らせた。それでも氣丈な男で、脚を引摺り引摺り相變らず出歩いていたのが、一日、戻ってくると、あらたまつて夕姫に言ったのである。

「姫、御身のその視力で旅をすすめるは無惨じゃが、何としても京へ上つて貰わねばならぬ事態がおこったワ。わしが、かように不自由な體でないなら言うこともないに……が、愚痴を申してもはじまらぬ。明朝にも、姫、京へ上つてくれい。」

「わらわひとりでか?……」

魂消て夕姫が問い返すと、苦笑いで賀源太はうなずき、

「やむを得ぬ。この書状をもって、三十三間堂南門外に明暗寺というを訪えば、西念なる普化僧が委細を手配してくれよう。何のために、姫が京へのぼるか、そのわけも、ここでわしが申すより、西念より直々に聞かれるがよい。」

「……」

「不安かい? わしとて、日の不自由な姫ひとりを遣らせとうはないわ。や、やむを得ぬのじゃ。」

……姫、そなたが宿年ののぞみ、龍造寺再興も、その姫の眼疾とても西念に逢わば必らず本復致す筈。うそではない、西念はそういう僧じゃ——な。」

夕姫の目には見えぬが、脂ぎってテラテラした顔面に、眼ばかり光らせて賀源太は繰返し彼女

を口説いた。

「その視力で女忍者の装束を致しては、拙い。道中、あくまでか弱い娘でとおすのじゃぞ。」
とも教えた。

夕姫は自分の居ない間の賀源太の不自由を案じ、再三「いやじゃ」と首をふったが、とうとう賀源太に説得され、江戸を發った。駿府をすぎたあたりで、急ぎ足に傍らを通りすぎようとした多三郎に、

「お……そなたは？」

聲をかけられたのである。

夕姫は、うすい視力の所爲もあつたらう、はじめは誰か判じかねた。あの肥前街道で武藝帳を争った相手と思ひ出したのも、大半は、多三郎自身の口から説明されてである。わずか半年餘りにすぎないが、まだ凜然としたきびしさを支えていた當時の、清純の目が偲ばれ、夕姫は一瞬言いしれぬ淋しさを味ったが、そんな、氣の弱まった風情を多三郎は却っていつくしみの目で見たらしい。

「……そなたも、京へ上られるか？」

「そうじゃ。」

「ほう、わけあってであろうが、その様になよなよとしておられると、當方、疑う氣もおこらぬ。ハッハ……旅は道づれと申すわ。ヨシ、わしが方も、ちっと見よい姿になって御身ともども

旅をしようか。」

言つて、夕姫の行動をそれとなく監視する意味も無論あつたらうが、岡部で投宿した翌朝、見違えるばかりのさっぱりした旅姿で、いかにも氣さくに旅程を偕ともにして來た。——この日が、その三日目である。

多三郎は風を捲いて東海道を走つた。

舞坂の宿から榎木の立場まで、山伏の法螺貝が空にひびいて、通りかかった商人が何事かと振りむき振りむき、ものの十歩も歩むか歩まぬかの間に、バラバラと木立から十數人の山伏のあらわれるのが商人には見えた。

「おや……」

と目を瞪るうち、武士二人と虚無僧めがけて一齊に磔が投げられ、ついで、手裏劍が風に舞う木の葉のように閃めきはじめたから、商人は膽をつぶしたが、その時にはもう、

「待てーっ。」

多三郎は商人のわきを駆け違つていた。

おそらく、その多三郎を、最初に目にとめたのは、天道法眼ただ一人だつたらう。

「やや……」

眼をむいて、三人への助勢と見抜いたか、矢庭に、

「えい。」

氣合鋭く、虚無僧の天蓋狙って手頃の小石を投じた。萬一、この襲撃が失敗におわっても虚無僧の正體だけは見届けよう魂膽からである。

清姫は、咄嗟に身をひらいたが、遅かった。「あっ。」と言った。磔の力で、天蓋の端を撥ねられ、笠は飛んだ。

友矩、又十郎の兄弟には見えぬ。兩人は、手裏劍を躲すだけの餘裕は、最早ない。

「又十郎、眼を守れ！」

叫びつつ友矩は笠の庇を取って、面を俯せ、片腕で胸をかばった。脚や腕に刺さるのは覺悟の上である。頭は、手裏劍の刺さる寸前パッパッと笠で拂う。この秘術が、又十郎には使えない。

少年の純情で又十郎はただ、兄とともに背ろの女性をかばうことしか頭になかった。だから、むしろ大手をひろげ氣味に手裏劍へ向って行く。

天は、稚純で勇敢なこの行爲を嘉よしなかった。

「たわけ！……退けい。」

叱咤が又十郎の前進を止める一瞬前、うっと呻き又十郎は手で口を覆った。タラタラ血が指の間からこぼれた。まともに、鼻へ磔をうけたのだ。其の場に又十郎はうずくまった。

「ど、どうした？……しっかりせい。」

叫ぶのと、

「や、お主？」

ぎょっと立竦んだのが同時である。

「話はあとじゃ。」

相手は併し、友矩へ聲を残して早や群がる山伏の中へ突き進んでいた。兩刀を手に把っている。

それから少時——。

距離の縮まるにしたがって手裏劍の效用は減じる道理で、意外な人物の闖入に山伏達も浮足立ってか、周章あわてて木立へ紛れ込む者もあり、立向って多三郎の早業にのけ反る者も一人、ふたりはあった。

天道法眼は、相手の業前を見抜いた。

「退れ、……退れ。」

配下に下知して、潮の退くように草叢を騒がせ彼らは木立に遁げ込んだ。

あとに——。

かがみ込んだ又十郎をはさんで、多三郎と友矩が無言に對峙する、そのうしろで、天蓋を脱いだ清姫のかがやくばかりに美しい貌かたち。

「……お主、柳生友矩か。」

「……」

「答えられぬな。——無理もない、兄の十兵衛ならかように無^ぶざまな襲撃は受けまい。」

「……」

「が、詰^なるは後のことに致そう。——さ、又十郎を^な見てやれい。」

多三郎は懐紙で太刀をしごき、先ず脇差を、ついで太刀を鞘におさめた。

それを見届けてから、友矩は又十郎の傍らに駆け寄り、

「しっかりせぬか、又十郎……これ。」

片膝ついて、突伏した又十郎の肩を、起した。

聲をのんで清姫はそれを見る。それから多三郎を好奇と、いくらかの自羞をまじえた、深い眸で、見まもる。

夕姫とは又別な、大らかに氣品ある清姫の容姿の美しさに遠^{とほ}がの多三郎も、聲が出ない。虚無僧の姿なので、妙に肉感的な情緒もその身から匂い立ってくる。

「そもじ……」

多三郎は、チラと友矩を見流した。

「柳生の、矢張り一味か？」